

学習院大学所蔵『万葉聞書』について

—解題と翻刻（上）—

柴江富範子

本書は、昭和二十四年三條西家から学習院大学に入ったもので、現在、同文学部日本語日本文学科研究室に所蔵されているが、管見の限りでは、これまで紹介されたことのない資料と思われる。以下、その概要を述べる。

袋綴の冊子一冊（紙背文書あり）。三條西家家紋八つ丁子文様を空押しした縲色表紙（縦二六cm×横二一・二cm）。『万葉聞書』という題簽が貼られているが表紙と同じく、学習院大学に入る際に補われたものであろう。本文二十四枚。内題はない。ただちに万葉集卷八の一四五〇番歌から始まり、七丁表まで主に漢字平仮名交り文でもつて卷八の和歌一四一首を抄出後、「永正十六 六月十七了」という日付、目録⁽¹⁾が記されている。次いで、七丁裏から十三丁表までは卷九の和歌一〇八首、その後に「永正十六 六 十九日了」とあり、一丁分白紙を挟んで、十五丁表から二十四丁裏まで卷十一の二五八首が同じく漢字平仮名交り文でもつて抄出、収録されているが、ここには日付が見えない。毎半葉十三行内外。墨校、書入れ、見せ消ち、補入あり。奥書なし。印記なし。総歌数五〇七首。

内題も奥書もなく、『万葉聞書』という書名は仮のものであるが、もともとは巻八以前もあつて、そこに書名があつたのかもしれない。すなわち、本書冒頭一四五〇番歌は春相聞第三首にあたるが、以後、部立名が記されているにもかかわらず、そこに部立名がないこと、また、巻八では春雜歌に相当する歌がないことを勘案すると、もともとはそれ以前もあつたとするのが妥当であろう。実際、目録に見える「屋主ノ真人」^{ヤヌシ}は春雜歌一四四二番歌の作者である。また、最後の巻十一の二七八四番歌の後には日付が打たれていないことから、これ以後も続けられた可能性もある。

本書の成立を考えるにあたり、まず手掛かりとなるのは、本書が三條西家に長らく保管されていたことと、「永正十六 六月十七了」（七丁裏）「永正十六 六 十九日了」（十三丁表）という日付である。永正十六（一五一九）年と言えば、三條西実隆六十五歳、その息公条三十三歳。実隆の日記『実隆公記』^{（2）}は永正十二年二月三日から永正十六年十一月までを欠いており、この件に関する記述はないが、『実隆公記』によると、実隆は永正八年六月、公条の求めではじめた『源氏物語』講釈を、本書書写の六年前である永正十年六月十七日から再開、七月からは一と七の日を定例日と定め、翌年の二月以降、講釈を再興しており、実隆が公条に三條西家の学問を継承させようとしていた時期に相当することが窺われる。

これに加えて、注目されるのは、本書に『歌枕名寄』に関する注記があることである。本書は万葉歌の抄出本といつた様相を呈しているが、以下の通り、『歌枕名寄』に関する注記が七箇所見える。

- ① 一四七四 大城の山 ^{オホキ} 右筑紫大城歌也 私名寄無之
- ② 一五三〇 蘆城野 ^{アシキ} 右蘆城野筑前国云々名寄無之
- ③ 一六九五 泉川 名寄無此哥
- ④ 一七四六 手綱の濱 名寄無之

⑤ 一七七二 稲見野

名寄イナミ野 ■ ■ 萩の哥無之可書加歟

⑥一八〇九
处女墓

右ヲトメ墓事全篇可見也

⑦ 一六七四 朽網山 名寄無之

右ヲトメ墓事全篇可見也

樋口百合子『『歌枕名寄』伝本の研究』によると、三條西家には実隆以来伝来された『歌枕名寄』があつて、これを親本とするのが細川本とされるが、この細川本と①～⑦を比較するに、本書の注記とは異なり、細川本には①②③④⑦はある一方、⑤「稻見野の秋芽子見つつ」は細川本では「印南野の秋見つつ」と「秋」だけで、萩の歌としては存在しないという点ではこの注記と合致していると言えなくもない。また、⑥の「全篇」とあるのは『歌枕名寄』のことであろうが、確かに、細川本はもとより『歌枕名寄』には処女墓の歌は見られない。永正十六年当時、存したことであろう三條西家の『歌枕名寄』は、その後、おそらく増補されて行つたのであろうが、それにしても、⑤「可書加歎」⑥「全篇可見也」と言える立場にあるのは三條西家の当主とその後継者に限られ、また、⑥「全篇可見也」と「直答」したという人物が実隆だとすると、その聞き手は公条ではあるまいか。

既に樋口前掲書に指摘のある通り、『実隆公記』には『歌枕名寄』や『名寄』が度々見え、就中、本書書写の九年前の永正七年三月二日の条に「宗碩法師來、宗哲、宗坡等同道、名寄哥不審所々以愚本之万葉以下比較之歸了（下略）」とあり、連歌師宗碩らが連れ立つて來訪、『歌枕名寄』中にある万葉歌の不審の箇所を尋ねられた実隆が、所持する『万葉集』等によつて比較したことが知られる。周知のように、長享三（一四八九）年五月、実隆は三十五歳で万葉部類書『一葉抄』を著した後も、終生、万葉集研究を続けており、『歌枕名寄』『万葉集』双方に通じてゐる実隆ならではの來訪であつたに相違あるまい。

以上、本書の成立を実隆が主導したものとし、従つてこれを仮題の通り「聞書」と捉えるならば、実隆が講述し、

公条が書写したと推測される。とは言え、本書で、最も重点が置かれているのは万葉歌の訓點であり、本書の内容としては、その他には先述の『歌枕名寄』に関する注記と、語釈が一箇所（後述する）見えるだけである。

先に触れた通り、本書では、和歌の表記は漢字平仮名交り文を主として、注意すべき訓讀には、例えば、「穴氣衝」（巻八、一四五四）、「恋宿合歓木花」（巻八、一四六一）など要所要所に、漢字原文を表記した上で右に片仮名傍訓を付す。その他、「恋しけば」（巻八、一四七一）、「めつらしく」（巻八、一六一七）などの振り漢字、「秋はき手折」（巻八、一五三四）、「開なゆめと」（巻九、一七四〇）など、片仮名による送り仮名も見られ、訓讀に注意が払われている。その一方で、訓讀に問題がない箇所については省略されることも少なくない。

牡牛の三宅の酒にさしむかふ—（巻九、一七八〇）

人となる云々天離夷治にと—（巻九、一七八五）

といつた長歌はもとより、短歌体の場合も

健男の—（巻十一、二三五四）

若月のさやかに（巻十一、二四六四）

など、歌の大半が略されている例もある。

本書が依拠した『万葉集』の訓の系統を論じる前に確認しておきたいのは、『一葉抄』完成から三十年後の永正十六年、本書が書写される時点で三條西家にあつた自家本『万葉集』と『一葉抄』が依拠したそれとは必ずしも同一ではないということである。実隆が『一葉抄』を編むにあたり依拠した『万葉集』は、文明十七（一四八五）年、宗祇から贈られた十四冊（巻七～巻二十）とその欠本を補つたものとされるが、『実隆公記』によると、その後、さらに整備と校合が進められ、その主なものだけでも、延徳三（一四九一）年九月二十四日の条「萬葉注釈終書写功了」とあつ

て仙覚の『萬葉集注釋』の書写を終えたこと、また、同年十一月十四日の条「抑萬葉集_{四冊不足}、十六冊玄清持來、是清蓮花院所持本也⁽⁷⁾」とあり、連歌師玄清によつて「清蓮花院」（正親町三条実雅）の所持した『萬葉集』十六冊がもたらされたことなどが挙げられる。

本書と『一葉抄』の相違で、まず、注目したいのは、『一葉抄』（卷七～卷二十）では、訓読上問題がある箇所には二種の訓文を記したものが多く、概ね、仙覚本寛元本系統に近い主文に對して、仙覚文永本系統の訓を書入れているのに対し、本書の場合は二種の訓文を記したもののが次の二箇所しか見えないことである。すなわち、「青山」の「青」右に「アヲ」、左に「オク」（卷十一、二七〇七）、「含」右「フヽメル」、左に「ツホメル」（卷十一、二七八三）の二箇所であるが、前者はそもそも類聚古集と紀州本にそれぞれ二種併記され、また、後者は、仙覚文永本がいずれも、右に「フヽメル」、漢字左に「ツホメル」としており、本書を書写した時点で依拠した一本に元々併記されていた可能性が考えられる。この二例を別にすると、本書の場合は一つの訓に確定する傾向が強く、従つて、本書に見られる訓はおそらく実隆によつて取捨選択された結果と考えられる。以下、自筆本『一葉抄』と本書に重出する歌四十八首の中で、明らかな誤写・誤脱、仮名遣い等（本書にも『一葉抄』と同様、特徴的な仮名遣いが見られるが今は措く）の違いを除き、相違の目立つ箇所を『一葉抄』、本書の順に掲出（傍線筆者）し、本書の訓の傾向を見て行く。

①こゝろうき物にそありける春霞たなひく時に恋のしけれは（卷八、一四五〇）
情具伎物コヽロクにそありける春霞たなひく時に恋のしけれは（一三三二）

②あわ雪のほとろ／＼にふりしけはならのみやこしをもほゆるかも（卷八、一六三八）
あは雪のほとろ／＼とふりしけはならの都しおもほゆるかも（卷八、一六三九）
③あさもよひきへゆく君（かか）まつちやまこへらんけふそ雨なふりそね（一六）

朝裳吉木アサモヨイ へ行君か信土山マツチ — (卷九、一六八〇)

④うちたをるたむの山きり□けきかもほそ川の瀬□浪さわきける (一六九)

捲手折多武山霧しけきかも細川の瀬に浪のさは(消) (ける) (卷九、一七〇四)

⑤ぬはたまのよるきりたちぬころもてのたかやのうへにたなひくまでに (一七〇)

黒玉の夜霧は立ぬ衣手の高屋のうへにたなひくまでに (卷九、一七〇六)

⑥おもやまにかすみたなひきさ夜ふ□□わか舟とめんと□りしらすも (一三四)

母山マモヤマ に霞たなひく (卷九、一七三一)

⑦あすよりはわれはこいんな。なほりやまいはふみならしきみかこゑいなは (四九四)

あすよりはわれは恋ナホリんな名欲山石踏平君イハフミナランかこえいなは (卷九、一七七八)

⑧いつとも恋せぬ時はなけれとも夕方狂て恋はすユウカタマケへなし (三八〇)

何時恋ぬ時イットテモとはあらね共夕方狂マケテ恋はす無乏へなし (卷十一、二三七三)

⑨あらたまのいつとせふれとわかこふる跡なき恋のやまぬあやしさ (三三一八)

鹿玉アラタマの五年ふとも (卷十一、二三八五)

⑩ゆけとくあはぬいもゆへ久賢のあまの露霜ぬれにたる哉 (二一〇)

ゆけとくあはぬ■いもゆへ久方の天露霜にぬれにたるかも (卷十一、二三九五)

⑪をとめらか袖ふる山のみつかきの久しきよゝりおもひきわれは (五〇五)

處女等ヲトメラを袖ふる山の水垣の久しき世よりおもひきわれは (卷十一、二四一五)

⑫かに山に雲ゐたなひきおほゝしくあひみしこらをのちこいむかも (八七)

香山に雲位たなひき (卷十一、二四四九) | カクヤマ クモヰ

トヨミテ

カトマラン

ハヤ

(13) なる神のしはしうこきてさしくもりあめもふらなん君をとめん (三一〇)

雷神のしはしとよみてさしくもり雨のふらはや君かとまらん (卷十一、二五二三)

(14) 久かたのはにふのこ屋にこさめふりとこさへぬれぬみにそへわきも (三一六)

彼方の赤土小屋に霖霖ふり床さへぬれぬ身にそへわきも (卷十一、二六八三)

(15) いもか門ゆきすきかてぬひさかたの雨もふらぬかそをよしにせむ (三一八)

妹か門行過かねつ久方の雨もふらぬかそをよしにせん (卷十一、二六八五)

これらの例を見て先ず気が付くのは、仙覚本系統の中でも文永本に近いとされる『一葉抄』榜書の訓と本書の訓とが、
(7)を除き、ほぼ合致することである。榜書のある『一葉抄』の訓、本書の訓を順に掲出する（括弧内は文永本である
西本願寺本の訓を参考に掲げた）。

(7) 「いはふみならし」「石踏平」（「イハフミナラシ」、「石」左ニ別筆「イシイ」）

(8) 「恋せぬ時はなけれとも」「恋ぬ時はあらね共」（「コヒヌストキトハアラ子トモ」、「ヌトキトハアラ子」青）

(11) 「をとめらか」「處女等を」（「ヲトメラヲ」、「下ノ「ヲ」青）

(12) 「かに山」「香山」（「カクヤマ」）

(13) 「うこきて」「とよみて」（「トヨミテ」青、漢字左「ウコキテ」）、「あめもふらなん」「雨のふらはや」（「アメノフラ

ハヤ」、「ハヤ」青）、「君をとめん」「君かとまらん」（「キミヤトマラム」、「トマラム」モト青）

『一葉抄』の訓で、主文(12)「かに山」、榜書(8)「アハ子」は、現存する萬葉集諸本に見えない独自の訓であるが、前者を「かこ山」、後者を「アラ子」の誤りと推測すると、『一葉抄』主文は、非仙覚本系統の訓（仙覚寛元本とも一致）

であるのに對して、『一葉抄』榜書と本書の訓は一致して仙覺文永本系統の訓を取つており、これらは、仙覺紺青訓（⑫）大矢本・京都大学本「ク」青）でもある。本書のこれらの訓は、ほぼ西本願寺本と一致しているが、⑬「君かとまらん」だけが、「キミヤ」をとる西本願寺本とは相違し、金沢文庫本（「キミヤトマラム」の「キミヤ」ノ右ニ貼紙別筆「キミカ」）・京都大学本（「キミカトマラム」）と一致する。また、⑦だけが、榜書の平仮名訓「いし」を本書「石」は採用していないが、「いし」は廣瀬本に見える古次点（西本願寺本にも残る）であり、仙覺による改訓ではないという点で、上記の例とは性格を異にする。本書の採択したこれら仙覺の訓の多くは今でも通用し、⑦「石踏平」^{イハフミナラシ}（⑪「處女等を」⑫「香山」）は今日、定訓となつている。⑧「恋ぬ時とはあらね共」も多くの注釈書で支持され、⑯「とよみて」も漢字原文「動」に「トヨム」の訓を付けること自体は動かない。仙覺の『萬葉集注釋』の書写を終えた成果とも考えられる。

次に、『一葉抄』の主文と本書が相違する箇所を、以下、榜書の場合と同様に示す。

- ① 「こゝろうき」「情^{コヽロ}具伎」（「コヽロクキ」、「ク」青）、「しけきは」「しければ」（「シケレハ」）
- ② 「ほとろ／＼に」「ほとろ／＼と」（「ホトロホトロニ」）
- ③ 「あさもよひ」「朝^{アサ}裳^{モヨイ}舌」（「アサモヨイ」、「イ」モト青）
- ④ 「浪さわきける」「浪のさは^{ケリ}」（「ナミノサワケル」、「ノサワ」モト青）
- ⑤ 「よるきり」「夜霧は」（「ヨキリハ」^消、「ヨキリハ」モト青）
- ⑥ 「たなひき」「たなひく」（「タナヒキ」）
- ⑨ 「ふれと」「ふとも」（「フレト」）
- ⑩ 「あまの露霜」「天露霜に」（「アマツユシモニ」）、「ぬれにたる哉」「ぬれにたるかも」（「ヌレニタルカナ」、「ナ」ノ

右ニ「モ古」—

ヲチカタ

⑭「久かたの」「彼方の」（「ヲチカタノ」、漢字ノ左ニ「ヒサカタ」）、「わきも」—「わきも」（「ワキモ」）

⑮「ゆきすきかてぬ」「行過かねつ」（「ユキスキカネツ」）

『一葉抄』の主文で非仙覚本系統の訓（③⑯以外は仙覚寛元本とも一致）と一致する①「こゝろうき」・「しけきは」③「あさもよひ」④「浪さわきける」⑤「よるきり」⑩「ぬれにたる哉」⑯「ゆきすきかてぬ」に対して、本書の訓①「情具伎」コ、ロク・「しけれは」コ、ロク、③「朝裳吉」アサモヨイ⑤「夜霧は」⑯「行過かねつ」は仙覚本系統と一致（⑯は仙覚文永本とのみ一致）、①（「情具伎」のみ）③⑯は仙覚紺青訓である。④は、一旦、仙覚文永本と同じく（仮名遣いを除く）「浪のさはける」（漢字原文「波驟祁留」）としながらも、「ける」を「ケリ」と訂正、「浪のさはけり」とするが、こうした訓は現存する萬葉集諸本には見当たらない。「けり」と結んでいるのは藍紙本「なみさわきけり」・類聚古集「なみさはきけり」と一本だけだが、本書は「浪のさはけり」としたのか、或いは、「なみさはきけり」を採用するつもりで、「けり」だけ書入れたのか、不明である。また、⑩「ぬれにたるかも」は、廣瀬本「ヌレニタルカモ」、仙覚文永本である西本願寺本・紀州本・温古堂本で「ヌレニタルカナ」に「ナ」を「モ」とする書入があつて本書の訓と一致するが、仙覚文永十年寂印成俊本には書入がない。

『一葉抄』の主文で仙覚寛元本系統（ただし、仙覚文永本系統の漢字左傍訓は含まない）とのみ一致する⑩「あまの露霜」（京大本「アマツユシモニ」、「マ」ノ下ニ代赭書入「ノ」）⑯「久かたの」（神宮文庫本・細井本・京大本代赭書入）に対して、本書の訓⑩「天露霜に」アマは京大本代赭書入以外の諸本、⑯「彼方の」は、廣瀬本、及び仙覚文永本の訓と一致する。

一方、『一葉抄』の主文②「ほとろ／＼に」⑥「たなひき」⑨「ふれと」が西本願寺本はもとより、諸本のほとんど

と一致するのとは違つて、本書に②「ほとろ／＼と」（漢字原文「保杼呂保杼呂爾」）⑥「たなひく」（漢字原文「棚引」）⑨「ふとも」（漢字原文「雖經」）といった例のあることも見逃がせない。本書と合致するのは、②「ほとろ／＼と」は非仙覚本の紀州本（「ホトロホトロト」）、⑥「たなひき」は同じく非仙覚本の伝壬生隆祐筆本（「たなひき」、「き」右ニ「ク」別筆カ）のみで、⑨は、諸本に例を見ない独自訓である。『一葉抄』に見える独自の訓については、「助詞に関して、萬葉集の本文から離れる、やや緩やかな訓読の姿勢が認められ」、「また動詞の活用語尾に特別の注意を払つて」いるとされるが、本書の、動詞の活用語尾の相違する⑥「たなひく」⑨「ふとも」や、漢字原文からはやや離れた②「ほとろ／＼と」などは、依拠した本の訓に従つたとも、或いは『一葉抄』に見られる独自の訓の傾向と軌を一にしているとも考えられる。

また、自筆本『一葉抄』と本書に重出する歌四十八首の中で、合致はしているものの双方、非仙覚本系統の訓である例もある。

⑯あをやきのかつらき山にたつ雲のたちてもゐてもいもをしそ思ふ（九〇）

春楊の葛山に立雲の（卷十一、二四五三）

双方一致して「あをやきの」「春楊の」（西本願寺本「ハルヤナキ」、五字青）とするが、これは、非仙覚本系統の訓（仙覚寛元本とも一致。ただし、仙覚文永本系統の漢字左傍訓は含まない）であり、嘉曆伝承本・類聚古集書入・廣瀬本・神宮文庫本・細井本と一致する。

仙覚本に従つた①「情具伎」⑤「夜霧は」⑭「彼方の」「わきも」⑮「行過かねつ」は今日、定訓となつており、先述した⑦⑪⑫と同様、当時としては一定の成果を上げていると評価されるが、その一方で、②「ほとろ／＼と」（漢字原文「保杼呂保杼呂爾」）④「浪のさは（ける）」（漢字原文「波驟祁留」）と言つた漢字原文からは離れた訓のある

（消）

」とも否定できない。

以上、自筆本『一葉抄』と重出する歌四十八首の本書の訓の傾向を見て来た。本書の多くは仙覚の改訓に従う一方、一部に非仙覚本系統の訓や、現存する万葉集諸本に見えない訓も残されている。こうした傾向は、本書全般においてもほぼ同様に捉えられる。詳細は別の機会に譲るが、本書の訓は概ね、仙覚文永本系統に近いものの、その一方で、非仙覚本とのみ一致するもの、例えば「^{テニラリ}指折て」（卷八、一五三七）（類聚古集「てにとりて」、墨ニテ「と」ヲ消シテ、ソノ右ニ「を」・廣瀬本「テニオリテ」）、「^{イチシルク}灼然」（卷十一、二四九七）（嘉曆伝承本「いちしるく」・廣瀬本「イチシリク」）など、散見するが、非仙覚本系統の訓としては非仙覚本単独の訓は少なく、その多くは、仙覚寛元本系統とも合致するもので止められている。その点、『一葉抄』の依拠した本文に近いとも言えるが、本書には、それよりも多様な訓が認められ、諸本に見えない独自訓もある。これは、本書の訓が取捨選択された結果示されたものであるとすれば、当然の帰結である。

最後に、一箇所だけ見える語釈について述べておきたい。「^{マツカヘリシヒ}松反四臂あれやは三栗の中にいてこす一」（卷九、一七八三）に続けて「釈かゝり」（十一丁裏）とあるのがそれである。上二句「松^反りしひてあれやは」⁽¹¹⁾は今日でも難解とされている。この上二句を、大伴家持の「放逸せる鷹を思ひ、夢に見て感悦して作る歌」の反歌「松^反りしひてあれかもさ山田の翁がその日に求めあはずけむ」（卷十七、四〇一四）の上二句が模したとされるが、橋本進吉が甲類の「ひ」である「しひ」（一七八三番歌「四臂」、四〇一四番歌「之比」）は盲目、耳しひのことであり感覚を失うことであらうとする説を発表された。⁽¹²⁾これについては諸注、従つてはいるものの、初句「松^反り」については今なお決着がついていない。本書に「かゝり」とあるのは、おそらく「松^反り」の「^反り」を「かゝり」（鳥がとまる）の意と捉えたのではないか。『日葡辞書』に「*Tacaga qini cacaru.* (鷹が木にかかる) 鷹が木にとまる」⁽¹³⁾とある他、「かかる」

は 次に示す通り、多く、鷹が木にとまることを表している。

ふたつありけるたかの、いらごわたりをすると申しけるか、ひとつのかはとまりて、きのすゑにかかりて侍ると申しけるをきゝて

すたかわるいらこかさきをうたかひてなほきにかへる山かへりかな
ともすれば木居にかかるあらたかの手なれぬほどをあはせつるかな

(山家集下・雑・一三八九)

(文保三年御百首・冬十首・一六六六・為藤)

(兼好法師集二〇三)⁽¹⁴⁾

はしたかの木るにかかりてくらす日はわれも家ぢにかへりかねつ
先述の橋本は「松反り」を鷹詞と関連づけ、「鷹が鳥屋にゐて、夏の末から冬の初にかけて、羽毛の抜けかはるのを鳥屋がへりといひ、山にゐてこれをするのを山がへりといふから、松に居て羽毛の抜け代りをするのを松がへりといふのであろう⁽¹⁵⁾」とした。本書も、おそらく鷹との関連で捉えたのであろうが、その解釈がいかなるものであつたかは語釈の他に知りようがない。が、橋本説のように「松反り」を「鳥屋がへり」「山がへり」と同様に解したところで、二句とのつながりがわからない。「反り」を「かかり」の意とし、松にとまつてゐるとする本書の解釈は、今日でも意義のある指摘である。私案を述べると、右の和歌の例で言えば、「山がへり」(巣鷹と違つて、山で毛変わりした後捕らえられた鷹)と言い「あらたか」(新鷹)と言い、鷹狩の鷹としてはまだ未熟な鷹が本分を忘れ、木にとどまつて飛行しようとしないことを意味しているとするならば、一七八三番歌は「中上り来ぬ麻呂といふ奴」、四〇一四番歌は鷹を逃がした「さ山田の翁」を、いずれも、鷹でもないのに「松かへり」、松の木にとどまつてじつと動かない役立たずと揶揄したと解されるのではないか。

以上、本書の紹介と、抄出された万葉歌の訓の傾向を中心に論じて來た。本書には内題も奥書もないが、「永正十六

六月」という日付から三條西実隆と公条父子にかかるまでの著述と推測され、『一葉抄』以後の三條西家の萬葉学の展開を今に伝える貴重な資料と言えよう。『歌枕名寄』に関する注も当時のありようを知る上で貴重である。最後に、御所蔵本の翻刻掲載を御許可くださり、閲覧・調査に際して種々御高配を賜つた習院大学日本文学研究室の御厚意に対し、深く謝意を表する。

注

- (1) 「目録」と言つても訓読上、注意される歌人名のみ摘出したものである。
- (2) この間、東京大学史料編纂所『三條西実隆画像と実隆公記』(一九九六年十月)に、永正十三年四月十三日に実隆公記別記「出家仮名記」が見えるのみ。
- (3) 『実隆公記』卷五之下(続群書類從完成会、二〇〇一年四月)によると、永正八年六月四日条に「朝間桐壺巻讀之、相公發起、連々可講也」、同六日条「午後帚木巻講之」、同八日条「帚木巻講尺」、同十一日条「午後講帚木巻、今日終功
三ヶ度
以」とあり、公条の発案で『源氏物語』桐壺巻、帚木巻を講じたことが知られる。また、同書永正十年六月十七日条「源氏講尺始之、自七月二七讀之」、永正十一年二月十二日条「源氏講尺再興、初音」とある。
- (4) 同書研究編第三部第二章「細川本所取万葉歌—朱の書入れをめぐつて—」(和泉書院、二〇一三年二月)。
- (5) 細川本本文は渋谷虎雄『校本謫枕名寄本文篇』(桜楓社、一九七七年三月)に拠る。
- (6) 『実隆公記』卷五之上(続群書類從完成会、二〇〇一年三月)。
- (7) 以上、『実隆公記』卷二之下(続群書類從完成会、二〇〇〇年十一月)。
- (8) 以下、『一葉抄』に関する記述や本文、歌番号は、中世万葉集研究会編『三條西実隆自筆本『一葉抄』の研究』(笠間書院、一

九九七年一月）に拠る。なお、同書では仙覚寛元本を神宮文庫本・細井本の二本とし、京大本代赭書入はその範囲外に置いたが、近年、京大本代赭書入を寛元本の一本と把握する田中大士「万葉集京大本代赭書き入れの性格—仙覚寛元本の現形態」（『國語國文』第八十一卷第八号、二〇一二年八月）、同「万葉集仙覚寛元本の底本—京大本代赭書き入れと仙覚本奥書からの考察」（『上代文学』第一二三号、二〇一四年十一月）に従い、京大本代赭書入を仙覚寛元本の訓として扱った。なお、煩雑を避けるため、『一葉抄』における訓の異同については割愛した。詳細は、同書、岩下武彦・江富範子・小川靖彦「自筆本『一葉抄』の訓について—萬葉集古訓との対照—」を参考にされたい。

（9）注（8）参照。

- （10）二七八四番歌左注に「鶲冠草」^{カラアキ}について「類聚古集く依此義者可和月草歟」とあるが、仙覚文永本に記されたものをそのまま書写したと見て、ここでは取り上げない。
- （11）以下、『万葉集』の本文は小学館新編日本古典文学全集本に拠る。
- （12）東京帝国大学国語研究会発表（一九四一年十一月二七日）。澤瀉久孝『萬葉集注釋』卷九に拠る。
- （13）土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（一九八〇年五月）。
- （14）和歌の引用本文と歌番号は『新編国歌大観』（CD-ROM版、古典ライブラリー）に拠る。
- （15）佐佐木信綱『評釋萬葉集』第六卷（六興出版社、一九五三年五月）所引。

解題は江富範子が担当した。

〔付記〕 貴重なご意見を賜った査読委員の先生方に心より御礼申し上げます。

翻刻 学習院大学所蔵『万葉聞書』

凡例

1. 一行の字詰、字の高さ、字の大小は、概ね原本に従つた。
 2. 漢字・仮名の区別をはじめ、宛字、仮名遣い、送り仮名、振り仮名などは、全てもとの通りとした。ただし、漢字・仮名の区別にあたり、本文が漢字原文か仮名書きかを判断しかねる場合（例、一四六一番歌「夜るは」の「夜」）、後考に備え、漢字で示した。
 3. 原本の誤字、脱字、衍字などは、そのまま翻刻した。
 4. 漢字の字体は、概ね校本万葉集の異体字表に準拠しつつ、原本の一々の場合に近い正字体または常用漢字字体にし、一二、三原本の字体のままにした。
 5. 仮名字体は、現行の仮名字体とした。
 6. 虫損、汚損などにより判読不能な場合は、□を以て示した。その際、原字の一部が見え、概ね判読可能な場合は、□右傍に（）括弧を設け、その文字を（カ）と注記した。
 7. 補入記号のある補入は、概ね原本通りの体裁で示した。
 8. 消した文字は（）括弧で囲み、上または傍に（消）と注記した。重ね書きによる訂正は、翻刻本文には最終の文字を記した。塗抹した文字は■で以て示した。当初の文字が概ね判読可能な場合は、左傍もしくは右傍に*を付し、脚注で補足説明をした。その他、説明を要する箇所については、同じく左傍に*を付し、脚注で補足説明をした。
 9. 丁数は、各表裏の区切りに」印を施し、その右に丁数を意味する数字と、オ（表）・ウ（裏）の略号を以て示した。
- 一 翻刻本文の上段に、検索の便を考えて、『国歌大観』（旧編）の『万葉集』歌番号を付した。
- 一 翻刻本文は、江富範子と柴田清子が協議の上、作成した。

1466 1465

1464 1463 1462 1461

1460 1459 1458 1456 1454 1453

1451 1450

情^{コロク}具^ク伎^ク物^クにそありける春霞たなひく時に恋のしければ

水鳥の鴨の羽色の春山のおほつかなくもおもほゆるかも

短哥

玉手次——夕されは鶴の妻よふ難波かた

波^{ナミノウヘユ}上^ア従^{ヒトヨ}みゆる^ニ嶋^{マサニ}の雲^{クモ}かくれ穴^{アメニ}氣^キ衝^{カシ}相^アわかれなん

此花の一与^{ヒトヨ}のうちに百種^{モククサ}のことそこもれるおほろ力^カにすな

やとにある桜の花は今もかも松風はやみつちにちるらん

世間^(は)常にしあらねはやとにある桜の花のちれる比^カも

戯^{ワケ}奴^{ワケ}^(消)和^ハ氣^キかためわか手もすまに春の野にぬける茅花^{スゲ}そ御^{マセ}食^シて

肥^{コエ}座^{マセ}

ひるはさき夜るは恋宿^{コヒヌル}合歡木^{ネフノハナ}花君のみみんや和氣さへにみむ

吾君に戯^{ワケ}奴^{ワケ}は恋^{コフ}らし給^{タマイタル}有茅花^{スゲ}を^{クヘト}■雖^レ喫^{イヤ}弥^{ヤセ}瘦^{ケタシ}にやす

わかもこ力形見の合歡木は花のみにさきて 盖^{□□□□}ぬかも

春霞^{タナヒク}輕^{ヒカ}引^{ヒカ}山のへた^トれ^トは

（春）^{（夏）} 雜歌

ほと^トきすいたくな^トなきそ汝^{ナカヨヘ}音^ノを五月の玉にあひぬくまでに
神なひのいはせの森のほと^トきす

1491 1490 1489 1485

1483 1479 1478 1476 1475

1474 1473 1471 1470 1468 1467

ほとゝきすなかる國にも去てしかそのなく聲をきけばくるしも

——聲きく小野の秋風にはき(の)さきぬれや聲のともしき

物のふの——山の常影に

恋しけはかたみにせんと我やと(の)うへし藤浪今さきにけり
橘の花ちる里の——片恋しつゝなく日しそおほき

へいまもかも大城の山にほとゝきすなきとよむらんわれなけれども

私名寄無之ける

右築紫大城山歌也

何奇毛幾許恋る時鳥なく聲きけば恋こそまされ

獨みて物おもふよひに郭公従此間なきわたる心しあるらし

我屋との花橘の何時毛珠にぬくへくそのみならなん

しのひのみをれは鬱悒なくさむと出立きけばきなく日晚

わかせこか屋との橘花をよみなく郭公みにそわかこし

家持唐棣花哥一首

夏儲而さきたる波祢受久方の雨打ふらはうつろひなんか

我屋との花橘はちりすきて珠にぬくへく實に成にけり

ほとゝきすまでとき(かぬ)あやめ(花)玉にぬく日をいた遠みか

宇の(卯)花の過は惜かほとゝきす雨間をかす従此間なきわたる

トヨシミ(消)

——
一
ウ

*声点
平平上

○
秋雜歌

1511 1510 1507 1503 1502 1501 1500 1499 1497 1496 1495 1492

なてしこはさきてちりぬと人はいへとわかしめし野の花にあらめや
夕されはをくらの山に鳴鹿はこよひはなかすいねにけらしも

家持

我屋とに百枝刺サシおふる橘玉カキにぬく 云々

銅鏡マスカハミ

短哥

■わきもこか屋との垣ウチのさゆり花ゆりとしいへ□不歌ウタハヌににる

(はか)

事しけみ君はきまさすほとゝきすなれたにきなけ朝戸ヒタひらかん
夏野のしけみにさける姫由理ヒメユリのしられぬ恋はくるしき物を
ほとゝきすなく寧オのうへの宇の花の獸事あれや君かきまさぬ
五月のや花橘を君かため珠に(消) (此) こそぬけちらまくおしみ

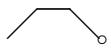
夏相聞

君か家の花橘は成ナリにけり花の有時サカリにあはまし物を
あしひきのこのま立ハタク八ハチ十トシ一イチほとゝきすかく聞ソメ始て —
わか屋とのなてしこの花さかり也手折ハサフて一目みせんこもかも
つくはねにわかゆけりせはほとゝきす山ヒタチひとよめなかましやそれ

1530	1529	1528	1527	1526	1525	1524	1522	1521	1517	1516	1514	1513	1512
天漢伊刀河浪はたゝねとも——	牽牛は織女等天地の別れし時由云々青浪に望たえぬ	しら雲になみたはつきぬ云々さにぬりの小舡もかも云々	反哥風雲はふたつの岸にかよへともわかとをつまのことそかよはぬ	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば
袖ふれはミモカハシツへク近けれど——	牽牛は織女等天地の別れし時由云々青浪に望たえぬ	しら雲になみたはつきぬ云々さにぬりの小舡もかも云々	反哥風雲はふたつの岸にかよへともわかとをつまのことそかよはぬ	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば
玉蜻蜒髪鬚にみえてわかれなは	牽牛は織女等天地の別れし時由云々青浪に望たえぬ	しら雲になみたはつきぬ云々さにぬりの小舡もかも云々	反哥風雲はふたつの岸にかよへともわかとをつまのことそかよはぬ	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば
牽牛のつま迎舟こき出らし——	牽牛は織女等天地の別れし時由云々青浪に望たえぬ	しら雲になみたはつきぬ云々さにぬりの小舡もかも云々	反哥風雲はふたつの岸にかよへともわかとをつまのことそかよはぬ	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば
霞立天の河原に君待と伊往還程に裳襪ぬれぬ	牽牛は織女等天地の別れし時由云々青浪に望たえぬ	しら雲になみたはつきぬ云々さにぬりの小舡もかも云々	反哥風雲はふたつの岸にかよへともわかとをつまのことそかよはぬ	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば
○天河浮津の浪音さわく(らし)わか待君し船出すらしも	牽牛は織女等天地の別れし時由云々青浪に望たえぬ	しら雲になみたはつきぬ云々さにぬりの小舡もかも云々	反哥風雲はふたつの岸にかよへともわかとをつまのことそかよはぬ	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば
娘部思秋芽子ましる蘆城野はけふをはしめて万代にみん	牽牛は織女等天地の別れし時由云々青浪に望たえぬ	しら雲になみたはつきぬ云々さにぬりの小舡もかも云々	反哥風雲はふたつの岸にかよへともわかとをつまのことそかよはぬ	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば	秋山に黄一反木の葉のうつろへは——	味酒の三輪の祝か山てらす——	經もなく緯もさためすをとめらかをれる紅葉に霜なふりそね	今朝の旦■鷹之鳴きゝつ春日山もみちにけらしわか心いたし	秋芽はさきぬへからしわか屋との淺茅か花のちりゆくみれば

*モト「鷹」力

右蘆城野筑前國 云々 名寄無之



珠匣葦木の河をけふみれば万代までにわすられめやも
草枕たひ行人もゆきふれはにほひぬへくもさける芽子ハキかも
伊香山野イカヨへにさきたる芽子みれば君かやとなる尾花しそ思
をみなへし秋はき手折玉桙ミチユキツトの道去裏ヨハシコノタメと為乞兒

我せこをイツツ何時曾今かと待なへに——

暮に相アヒて朝面羞アサカホハヅルカクレ隱野の萩はちりにきもみちはや續ソケ也

1536 1535 1534 1533 1532 1531

1537

1546 1545 1543 1541 1540 1539 1538

「三才

秋の野にさきたる花を指折テニラリて可伎数カキカソふれは七種の花

芽の花。乎花葛花。瞿麦の花。姫部志又藤袴朝兒の花

秋の日の穂田ホタを鴈之鳴カリカネクラヤミ闇トに夜の穂杼ホトト呂にもなきわたるかも

今朝のあきけかりかね寒み聞しなへ野への淺茅そ色つきにける
吾岳ワカツカに棹牡鹿ハツハキきなく先芽の花つま間にきなくさをしか

秋の露は移ウツシなりけり水鳥の青葉の山の色付みれば

織女の袖續アカツキ三更の五ヒトメ更は河瀨ヒトメのたつはなかすともよし
妹許イモカリとわか行道の川のあれは附目ヒトメつゝむと夜そふけにける

樟鹿の芽に貫をける露の白珠——
ハキ
ヌキ

晚芽子歌

さく花もウツロハうきを奥手なるなかき心に猶しかすけり

乎曾古本

いめたてゝ跡見の岳邊の瞿麦花。総手折われはもてゆかん
■ フサ

なら人のため

秋芽のちりの 亂 尔呼たてゝ 嘸なる鹿の聲のはるけさ
時まちて落る鐘礼の雨やみてあさかの山の――

夕月夜心もしのにしら露の置こ
オホキミの
皇の御笠の山の秋黄葉は—

秋立っていくかもあらねはこのねぬる

秋田かる借廬もいたこほたねは鴈かね寒し霜もをきぬかに

あすか川逝廻岳之秋芽子は

鶴鳴ふりにし里の秋芽子を思人とちあひみつるかも
イタソラ

秋萩はさかり過るを
徒にかきしにせよてかへりなんとや
ミシメノ

いもかめを始見るの秋芽子は

1561

吉名張の猪養の山にふす鹿の——

秋付ツケは尾花かうへに置露のけぬへくもわれはおもほゆるかも
我屋との一村萩を——

久方の雨間アマコモリコヽロイフもをかす雲かくれなきそ行なる早田鷹かね
雲かくれなくなる鷹の行てゐん秋田の穗立■ホタチしけくしそ思

雨隠カシ情鬱カスカ悒——

こゝにありて春日やいつこ雨障アマサハリ——

春日野にしきれふるみゆあすよりはもみちかさゝん高圓の山
此岳フミにをしか履フミおこしうかねらひかもかくすらく君ゆへにこそ

今朝鳴アサナキてゆきしかりかね——

朝戸あけて物思時に白露のをける秋萩みえ喚ツ雞もとな

さをしかの来立鳴野の秋萩は——

布將シキテミント見我キタチナクおもふ君は秋山のはつもみちはに似てこそありけれ
平山の峯のもみち葉——

あしひきの山の黄葉はこよひかも浮ていぬらん山川のせに
平山を令ニホ丹黄葉手折きてこよひかさしつちらはちるとも

「四才

「四ウ

1623 1622 1621 1618 1615 1614 1605 1602 1599 1598 1595 1594 1592 1591

黄葉スキの過まくおしみ思どち
然不有ナラス五百代ホシロ小田ホシロをかりみたり(消)田タケ廬フセに居レハみやニおもほゆ
佛前唱歌

しぐれの雨まなくなりそ紅に丹保タケチへる山のちらまくおしも
右冬十月タケチ——田タケチ口タケチ朝臣タケチ東タケチ人置タケチ始連長谷タケチ

秋芽子トヲの枝ニも十尾トヨ二ムをく露トヨの——

さをしかの朝たつ野トヨへの秋芽子トヨ——
さをしかの胸別トヨにかも秋芽子トヨの

山トヨひこのあひ響トヨまで妻恋トヨにしかなく山トヨ——

高圓の野トヨへの秋萩此比トヨの曉露トヨにさきにけんかも

秋相聞

ナカツキ
九月ナカツキの其始鴈ハツカリの使ナカツキにもおもふ心ハツカリはきハツカリこぬかも

大乃浦オホの其長濱オホによる浪寬ユタケクきみをおもふこの比

玉にぬきけさてたはらん秋芽子ワカのうれワカ——ラ葉ワカにをける白露ワカ

わか屋との秋の芽スカタさく夕影スカタに今モミヅルみてしかいもか光儀カヘを
我屋モミヅルとに黄变蝦モミヅル手テみることに——

1635	1634 1633	1630	1629	1627	1625 1624
冬雜哥				歌二首	家持攀非時藤花并芽子黃葉二物賜坂上大娘
				長哥	天平十二年
				我屋との非時藤のめつらしく今もみてしかいもか咲容を	六月作
				峯向につまとひすといへ云々	
				たかまとの野への容花面影にみえつゝいもはわすれかねつも	
		手■ てもすまにうへしはきにやかへりては—— 衣手に水澁付まで■うへし田を引板われ(はへ)まもれるくるし		叩々物を思へは云々夕には床うちはらひ云々山鳥こそは	
		尼作頭句并家持所逃尼續末句等和一首		峯向	
	さほ河の水(の)を塞(せき)あけて■うへし田を尼作			に	
	かる早飯(ワサイヒ)はひとりなるへし 家持續			歌	

1656 1655 1654 1650 1649 1648 1644 1643 1642 1641 1640 1639 1638 1637 1636

大口の真神の原にふる雪は甚なふりそ家もあらなくに
元正天皇御製

波太すゝき尾花逆葺黒木もてつくれる屋とは万代までに

聖武

サカフキ

青丹吉ならの山なる黒木もてつくれる屋とはをれとあかぬかも
沫雪のほとろ／＼とふりしけはならの都しおもほゆるかも
吾岳にさかりに盛にさける梅花のこれる雪を乱つるかも
あは雪にふられてさける梅花君か許やらはよそへんかも
棚霧タナキリあひ雪もふらぬか梅花
天霧アマキラシ之雪もふらぬか灼イチ然此五柴シロクノイツシハ
五柴にふらまくをみん

引よちて折らはちるへみ梅花袖にこきいれつ染ツまはそむとも
十二月にはあは雪ふるとしらぬかも梅花さく含ツボメらすして
今日ふりし雪に競イソヒて我屋との冬木の梅は花さきにけり
池の邊の松の末葉にふる雪は五百重イホエふりしけあすさへもみん
松影のあさちかうへのしら雪を――

冬相聞

高山の菅の葉しのきふる雪けぬとかいふも恋のしけゝく
酒盃に梅花うけて思共どちのみての後はちりぬともよし

「六才

1657

ツカラ にも 縱たまへる今夜のみのまん酒かもちりこすなゆめ

右酒者官ノ禁制ニ備京中闇里不レ得ニ集宴一但親々一ニ

飲樂ハ聽許者縁此和人作此發句焉

1659

真木のうへにふりをける雪の——
梅花ちらす冬風の音にのみ

1662 1663

あは雪のけぬへき物を今までになからへぬれはいもにあへるそ
あは雪の庭にふりしきさむき夜を手枕まかすひとりかもねん

永正十六 六月十七了

目録

屋主ノ真人	藤原夫一人	小治田ノ廣瀬ノ王
刀理ノ宣令	石上ノ堅魚	大伴書持
奄君諸立	縁達	典鑄正
大伴利上	師	六人部親王
角朝臣廣辨	宿奈丸	賀係
	像見	日置
他田		

一六四

第九
忍壁皇子

雜歌

ゆふされは小椋の山にふす鹿——

朝霧にぬれにし衣ほさすして独や君□山ちこゆらん
白埼は幸在待大船に真梶繁貫シヌキ又かへりみん

三名部ノ浦しほなみちそね——

朝開滂出てわれは——

湯羅のさき——白神の儀——

黒牛方塩干の浦を紅の玉裙す(道)引行はわかつま

風莫の濱のしら浪——紀伊國

藤白の三坂をこゆと

せの山にもみち常敷——

山とにはきこえも行か大我野の竹葉かりしきふせりをりとは

木の國の昔弓雄の響矢もて鹿とりなひく坂の上へにそある
朝裳吉木アサモヨイへ行君マツチか信土山——

詠仙人形

1700 1699 1697 1695 1694 1693 1692

1691 1690 1689 1688 1687 1686 1685 1684 1683 1682

常シヘニ夏冬ゆけや 裳 扇はなたす山にすむ人

カハコロモ

いもか手をとりて引よちうち手折わかゝさすへき花さけるかも
春山はちりすくれとも三和山はいまたつほめり君待かてに
河の瀬の激タキルをみれば玉藻かもちりし乱である川とかも
ひこ星のかさしの玉のつま恋に乱にけらし此川の瀬に
白鳥の鷺坂山の松影に――

姦アフリホス干人アマカラヒトもありやもぬれきぬを家にはや□ん羈タヒノの印シルシニ

ありそ邊に著榜ツキテ尼杏アマカラヒト人の濱アマカラヒトをすくれば恋しくある也

高嶋のあと川浪は驟サワケともわれは家おもふたひねかなしも
客にあれは三更さしててる月の高嶋山にかくらくおしも

我恋ふる■いもにあはさす玉ノカ浦に衣かたしき獨かもねん

玉くしけあけまくおしき惱夜アロラカを――

細比礼タケヒレの鷺坂山のしらつアロラカし――

妹か門いり泉川の床なめにみ雪のこりアロラカいた冬かも

家人のつかひなるらし春雨アロラカのよくれとわれ□ぬらすと思へは

巨椋オホクラの入江響なりいめ人の

金風の山吹の瀬のなるなへに

■名
寄無此哥

*モト「無」カ

一八才

1725 1723 1722 1717 1716 1715 1713 1711 1710 1709 1708

1707 1706 1705 1704 1702 1701

さ夜中と夜はふけぬらし鷹かねの——

いもかあたりしけき苅音夕霧に

球手折多武山霧しけきかも細川の瀬に浪のさは(けり)

冬木成春部を恋てうへし木の

黒玉の夜霧は立ぬ衣手の高屋のうへにたなひくまでに

ヤマシロ山代の久世の鷺坂

春草を馬咲山

波

御食むかふ南渕山の巖にはちるなみたれか(け) つりのこせる
わきもこか(泥塗) 赤裳泥塗う(消) へし田をかりてをさめん倉無の濱

モツテ百傳の八十の嶋廻を榜くれと粟の小嶋はみれとあかぬかも

瀧のうへの三船の山より秋つへにきなきわたるはたれよふこ鳥
樂波の平山風の海ふけは釣するあまの袂(ソテカヘル)変みゆ

しら浪の濱松の木の手酬草いく世までにか年(の) へぬらん

ミツカハノ三川の淵瀬もおちす左提さし(て)

吉野川河浪たかみたきの浦をみすかなりなん恋しきまくに

河蝦なく六田の河の川楊の

イニシヘ古の賢(サカシキ)人のあそひけん吉野の川原みれ□□かぬかも

難波かた塩干に出て玉藻かるあまのをとめらなかな □さね (告カ)
暁の夢にみえつゝ梶嶋の石越浪のしきてしそ思
山品の石田の小野のはゝそ原みつゝや君か山ちこゆらん

一九〇

母山に霞たなひく

たか嶋のあしりの海を

わかたゝみ三重の河原の磯のうらに

山高みしらゆふ花に落たきつ夏みの川と
オホタキ
大瀧を過て夏みにそひてゐてきよき川瀬□みるかさやけさ

詠上総末珠名娘子一首 并短哥

水長鳥あはに繼たる梓弓末の珠名は胸別の 云々 端正に
シナカトリ ツキ タマナ ムネワケ

詠水江浦嶋子一首 并短哥

春の日のかすめる時に墨吉の岸に出ゐて釣船の 云々 水江の浦

嶋の兒の堅「魚釣鯛釣矜及レ七」日家にもこすて海界を過て
榜行に云々 世間之愚人之。云々けふのことあはんとならは此箇を開クな
ゆめと云々 家を出て三歳の程に牆もなく家滅めやと此箇

をあけてしみては云々 玉「箇 小披に白雲の箱より出て常世へに
トコヨ クシケスコシアカル

1750	1748	1747	1746 1745	1744	1742	1741
暇 <small>イトマ</small> あらはなつさひわたり 向 <small>ムカツ</small> 峯 <small>ヨコ</small> の桜の花もおらまし物を	反哥 <small>ホツ</small> 最 <small>ヒコ</small> ■末枝には 云々	吾ゆきは七日はすきし龍田彦 <small>ヨメ</small> 勒此花を風にちらすな	白雲の龍田山の瀧上 <small>ヨククラ</small> の小按の嶺にさきをせる桜の花は山高み 云々	前玉 <small>サキ</small> の小琦の池に鴨そ翼霧 <small>ハネキル</small> をのか身にふりをける霜をはらふとに あらし	級照や片足羽河の左丹 <small>サニ</small> ぬりの大橋のうへ従紅 <small>ユ</small> の赤裳すそ ひき山藍 <small>アヒモテ</small> 用するきぬきて 云々 若草のつま <small>（シ）</small> あるらん 檻實 <small>カシノミ</small> <small>（消）</small>	棚引 <small>シラケ</small> ぬれは立 <small>シテ</small> 走 <small>リ</small> 云々わかゝりし皮 <small>シハ</small> も皺みぬ黒かりし髪も 白斑 <small>シラケ</small> ぬ

1759	1758	1757	1756	1755	1753	1751
						難波經宿明日還来
					河副の丘邊の道に	
					検稅使大伴卿登筑波山	
					衣手の常陸國の二並の筑波の山を 云々 热に汗かきなけて	
					云々 委曲	
					詠霍公鳥	
					鶯の生卵の中に霍公獨うまれて己父に似てはなかす己母に似	
					てはなかす卯花の 云々 橘を居ちらし	
					反哥	
					搔霧し雨のふる夜を	
					登筑波山哥	
					草枕 云々 つくはねにのほりてみれば尾花ちるしつくの田井に	
					鴈かねも寒くきなきぬ新治の鳥羽の淡海も秋風に	
					反哥	
					つくはねのすそはの田井に秋田かるいもかりやらんもみち手折な	
					登筑波嶺為讌歌	
					鶯の住つくはの山の裳羽服津の其津のうへに 云々 人もことゝ	
					モハキツ	

へ此山を牛掃神のむかしより
ウシハクカミ

詠鳴鹿歌

三垣の山に秋芽子の 云々

倉橋の山をたかみか —

七夕哥

久方の天漢ノカハラに 上瀬ノホリに珠橋カハラわたしくたり湍に船うけすへて
雨ふりて —

天漢きり立わたり旦今日ノとわか待君か船出すらしも
わきもこはくしろにあらなん左手の吾奥の手にまきていなましを

三諸のや神のおはせる泊瀬川水尾ミヲのたえすはわれわすれめや
○をくれゐてわれはや恋ん稻見野の秋芽子見つゝなんこゆへに

右大神大夫任筑紫國時作 *名寄イナミ野 ■ ■ 荻の哥無之可書加歟

神なひの神より板にする杉のおもひもすきす恋のしけきに

泊瀬川夕渡りきて —

○絶等寸の山の峯上オノヘの桜花 —

君なくはなど身将装飴ミカサラムくしけなる黄楊ヲクシの小梳コケもとらんともせす
あすよりはわれは恋んな名欲ナホリ山石踏平イハフミナラン君かこえいなは

「十一才

*モト「イ」カ

*モト「無之」カ

1790	1787	1786	1785	1784	1783	1781	1780
秋萩を妻とふ鹿こそ 云々 客にしゆけは竹珠を密にぬき タレイハイヘ タカタマシ	天平五年	虚蟬の 云々 石上ふりにし里に紐とかすまろねをすればわか■たる キ	みこしちの雪ふる山をこえん日はとまれるわれをかけて小竹はん 人となる 云々 天離夷治にと	反哥	神龜五年秋八月哥	海若のいづれの神を斎祈はか往方も來方も船のはやけん 松反四臂であれやは三栗の中にいてこす	牡牛の三宅の酒にさしむかふ 反哥

1801	1800	1799 1798 1797 1795	1794	1793	1792	1791
過葦屋處女墓時作 古の益荒丁子の云々 あしの屋のうなひをとめの	過葦屋處女墓時作 古の益荒丁子の云々 あしの屋のうなひをとめの	塩氣たつあら磯にはあれと ふるき家にいもとわかみし黒玉のくろ牛かたをみればさふしも 玉津嶋磯のうらまのまなこにも 過足柄坂――	いちらかりいま木の山 塩氣たつあら磯にはあれと ふるき家にいもとわかみし黒玉のくろ牛かたをみればさふしも 玉津嶋磯のうらまのまなこにも 過足柄坂――	立かはる月かさなりてあはされは―― 挽哥	垣保なす人の横辞 <small>ヨココト</small> しけきかも―― 反哥	客人の屋とりせん野に霜ふらはわかこはくゝめ天の鶴群 <small>ツルムラ</small> 思娘子作
マスラフトコ	ヲカキウチ	アサ	ヒキ	ヒモ	ヒモ	ヒモ
マスラフトコ	ヲカキウチ	アサ	ヒキ	ヒモ	ヒモ	ヒモ
マスラフトコ	ヲカキウチ	アサ	ヒキ	ヒモ	ヒモ	ヒモ

「十二才

反哥

いにしへの小竹田をのこの妻とひしうなひをとめの奥つきそこれ
哀弟死去——

父母か云々 朝露のけやすき命 云々 黄泉のさかひに

はふつたの各々向く天雲の——十六の云々 葦垣のおもひみたれて
春鳥のねのみなきつゝ味澤相

反哥

あしひきの荒山中にをくりをきて——

詠勝鹿真間娘子——

雞鳴——かつしかのまゝのてこなか麻衣に青衿きて

反哥

かつしかのまゝの井みれば

見菟原処女墓——

あしの屋の——燒大刀の手かひをしねり白檀弓鞬とり負

水に入火にもいらんど云々 完串呂云々 如己男尔まけては

あらしと懸佩の小釣とりはき冬寂蕷つら

1809 1808 1807 1806

「十一」

■■私
右ヲトメ墓事全篇可見也
直答

永正十六
六
十九日了

「十三才

（本学名誉教授・本学大学院研修者）